

医学のシルクロード

松田 博子

京都医学史研究会／日本医史学会

世界史の流れの中で紀元前の数世紀の間、ギリシャではソクラテス、アリストテレス、プラトンが、そして医聖ヒポクラテスが、インドでは釈迦、侍医ジャーヴィカ、ウパニシャッド哲学、中国では孔子、孟子らが次々と出現した。この中、釈迦をはじめ真の人間としての自覚を得て、高度な生命観、医学倫理が説かれ、現在に至る果実をもたらした。

シルクロードは、命がけで先人が行き交った約4000年の歴史を持つ。一本の絹の道はオリエントを網羅。東西大陸間の、文明を西から東へ砂漠や草原の時空を超えて進んだ。

その終着点は日本の平城京、平安京である。正倉院宝物、60品目の医薬については広く衆知の事だが「シルクロード医薬」として一つの証でもある。注目したいのはそれがインド医学アーユルヴェーダの伝播と言う事だ。又、京都の医史跡の中の国宝の仏像、書物の中に中国から伝来の文物があるが、その中国とインドを射程に比較的研究の余地がある。

京都の医学の歴史を考える時、インドの仏教医学抜きには考えにくい。中国の道教、儒教も重要である。インド、中国、ギリシャの古代医学に共通する考え方に触れてみたい。自然界を構成する「万物の基本成分」が何であるかという問題は古代から哲学者が思索するところであった。

紀元前7世紀頃、ギリシャのヘシオドスは、万物は土から生じ土に帰すと自然観を立てた。古代中国の五行思想に類似。紀元前6世紀初めインドの釈迦は地水火風空の五大を唱え、ギリシャのアリストテレスは約1世紀後5元説を提唱した。身体と宇宙はマクロとミクロの法則から人間の生命との関係を想定した。病気の原因を四要素で論じたインド医学とギリシャ医学の四体液説は近い。ところで西洋の源泉がギリシャであり、東洋の源泉がインドであるとするならば、古代においては共通の価値観の上で交流があったと思われる。

紀元前2世紀、インド北部のギリシャ人の王ミリンダは哲学としての仏教に関心を抱き後に「ミリンダ王の間」という仏典となる。別記する。

以下、東西の医学の比較、西洋医学と東洋医学の特質の違いは別記する。

釈迦は人間の生涯を生・老・病・死の四苦と見、その苦しみから救われる道を求めた。

仏教が生んだ文明に五明（Pancha, Veda）がある。①内明 ②日明 ③声明 ④工巧明 ⑤医方明

医方明は医学、薬物学、看護学であり、学術全般の分類と病の原因の治療方法を示した。釈迦は王子であり、帝王学として医放明を学び応用。この生命力を発動する疾病治療は自然治癒力のバランスを原則とした。ニーチェが「釈迦は生理学者である」といったことが理解される。医方明は7世紀のインドに20年滞在した唐の義浄により経典の中の薬物を示したサンスクリット語原点から漢訳されている。

所で先の唐の義浄の著書「南海寄伝」に「八医」として医療内容を記している。

「金光明王最勝王経」ではあらゆる病気の治療法が八術に分類され外科・内科・小児科・精神の療法を示す内容となっている。別記する。

また仏典の中の医学関連の資料は医学的方法論とされた。①病を知り②病の原因を知り③治療法を知り④病源を除いて再発を防ぐ法を論じ、四大調和の回復を目指している。

インド医学が釈迦を各教典の中で「大医王」とよび「大般若涅槃経」では、死に至る疾病を克服するプロセス、死から生へと転換する。医学関連の仏典は約14あり資料とし別記。

文化人類学者レヴィ・ストロースは「過去の伝統と現在の革新の見直しは日本人のみならず全人類にとり有益だ」と言っている。今、人類は世界観の相違に基づく闘争が続いている。日本に混在する医学の精神、医の愛・医道は困難な未来を切り開くであろう。